にじたま

Vol.32
2022年　春号

多様な性のあり方と、
幸せと人生と笑いを考える、
にじいろたまご通信！

2021年度活動報告

にじたま会をオンライン開催

新型コロナ感染症の感染拡大防止のため、交流会である「にじたま会」をオンライン（Zoom）で開催しました。交流会を運営する有志メンバーの不足もあり、今年度は4回の開催となりましたが、LINEオープンチャットを使った短時間の交流会を行う試みも行っています。

安定した開催は難しい状況ですが、Twitterで随時発信していきますので、フォロー＆チェックをよろしくお願いします！

@gochamazetamago

アピオあおもり秋まつりにオンライン参加

青森県の男女共同参画フェスティバルである「アピオあおもり秋まつり」。昨年度は中止となりましたが、今年度はオンライン配信を含めて2021年11月13日～12月13日の日程で開催されました。スクランブルエッグでも3つの企画とショートムービーで参加しました(*^^*)

企画・作品は、YouTubeにて公開しています！ぜひご視聴ください☆

●TBCたまごブロードキャスティング部
https://www.youtube.com/channel/UCp2mg2wP0soPR9-MkkrHwWA

【企画1】え？パートナーシップ宣誓制度？！

東北地方初となるパートナーシップ宣誓制度を導入した弘前市企画課の担当者さんにインタビュー。事前にTwitterで募集した質問のほか、ちょっとした疑問やぶっちゃけた話まで担当者さんに伺いました。

【企画2】スクールカウンセラーさんといっしょ
～子どもの多様な性と向き合う～

性的マイノリティのお子さんがいる青森県内の保護者の方から体験談を寄せていただき、スクールカウンセラーで臨床心理士・公認心理士のしーもさんとトーク。子どもたちの様々な悩み、またそれを見守る保護者の方たちの思いに触れました。

【企画3】いのちを大切にするって、何？
～助産師ともちゃんからのメッセージ～

命と性をテーマに、助産師として活躍する“ともちゃん”に、その想いや性的マイノリティの活動に関わるようになったきっかけを伺いつつ、自分を大切にすることについて考えます。スクランブルエッグ代表・ヒロの体験も。BGMはシンガーソングライター・ayano kuronë（クロネアヤノ）さんの生演奏！

【ショートムービー】スクランブルエッグ活動紹介

2008年からこれまでの活動を、サークル初となるスライドショーで振り返ります。

【ショートムービー】心の内

父と娘の、カミングアウトを巡る思いを描いたオリジナル作品です。

その他の活動は13ページでも紹介しています！

特集1

ほんのり ALLY（アライ）

第4回

多くの人が日頃から利用している病院。けれどLGBTの人にとっては、受診するのに障壁があるのかもしれない。そう考えて、医療の側からその壁をなくしていきたいと研究に取り組む人がいます。

今回は、弘前医療福祉大学（2022年4月からは青森県立保健大学）で教員をされているまりさんにインタビューしました。

◇取材日：2021年11月17日

◇インタビュアー：創、あき、あずき

＊＊＊＊＊＊

きっかけは、医療機関での体験

創：研究のきっかけは何かあったんですか？

まり：今の大学に勤める前に、一般の医療機関で相談業務を担当していまして。そのときはLGBTの方からの相談というのはなかったんですけど、各外来には電話が来ていたらしいんです。組織的には、それをキャッチできていなかったんですね。それでどういう対応になったのかと聞くと「よく分からないから断っちゃった」と。

LGBTの方が受診すると言えば、精神科やジェンダークリニックを連想する人も少なくないと思うんですけど、一般の医療機関の、例えば救急外来などの受診もあって普通のことなんですよね。どの方でも同じように色んな病気を持つわけですから。それなのに、実は相談の時点でブロックしている例が結構あるんじゃないか･･･というところがすごく気になりました。

誰もが同じように受診・治療する権利がある

そのことがずっと引っかかっていたのですが、たまたま医療機関から離れて大学で研究できるようになって。そこで上司にも相談して、このテーマに取り組むことにしました。

創：衝撃です（汗）医療機関の内部のことって、利用する側からは分からないので･･･。

まり：近年は病院の中で相談部門もできはじめてはいると思うんですけど、そこに辿り着く前の外来で終わってしまっていたり、相談部門に来ても相談部門の人もちゃんと理解できていなくて、うまく受診に繋げられなかったり。いち医療機関がそうであれば、全国のどこの病院でもそういうことがあるんじゃないかなと思ったんですよね。

創：病院内では連携がとれているのかと思ったら、そうとは限らないんですね。

あずき：そういう研究をされている方って、これまでにいらっしゃったんですか？

まり：私が調べた範囲ではそれほどなくて。海外ではいくつかあるんですが、医療体制そのものが違うので比較にはならないんです。国内だと看護部長さんへのアンケートなどが目立つところで、医療機関の内部への調査はないですね。

研究、調査の内容について

創：まりさんの研究について教えてください。

まり：まず2年くらい前なんですけど、東北地方のLGBTの方たちにご協力いただいて、医療機関の受診のしづらさに焦点を置いてウェブでアンケート調査させていただきました。全国調査はあるのでデータは出そろっているというご意見をたくさんいただいたんですけど、コロナ禍でもあるし、全国調査から数年経っているし、東北の地域性による受診のしづらさもあるのではないかと考えたんです。

現在（インタビュー時点）は2つめとして、全国の一般の医療機関の所属長、相談窓口のソーシャルワーカーを対象に現場の現状を調査しています。

実際にはウェルカムだという医療機関もあるし、「来てくれたらなんでも相談を受けるのに」というスタンスの方もいるのですが、来るまでが大変だということに医療機関の側では気づけていなかったりするんですよね。

今の医療機関の現状と、そこにLGBTの人たちが病院を受診するまでの壁になっているものはないのかというところの調査を、12月からする予定です。

同性パートナーへの医療機関の対応

創：医療機関での困り事といえば、同性パートナーのこともありますよね。急にじゃないですか、医療機関でパートナーとして動かなきゃいけなくなるときって。

まり：病気っておおかた急にすべてのことが変わっていくので、そこにどれだけ医療機関がちゃんと対応できるのかというのも大きな問題だと思っています。現状としては家族＝血縁者という感覚だったり、LGBTのご家族という認識がまだ医療機関の中で浸透していなかったりするので、そこの理解を深めることが必要だなと思います。

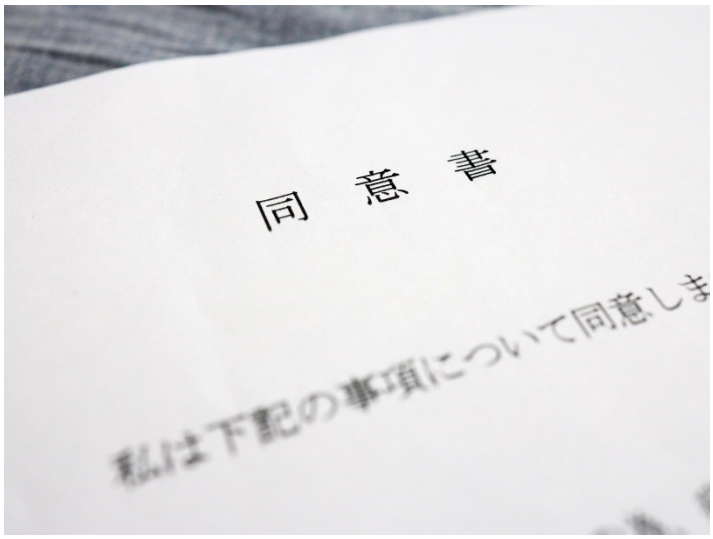
創：例えば身内がいらっしゃらない方が緊急で運ばれてきて、本来であれば家族の同意が必要なケースって、どう対応されているんですか？

まり：私の経験談だけにはなってしまうんですが、ご家族が分からない人が来た場合でもとにかく血縁者を探すんですね。ソーシャルワーカーが主になって、役所なり警察署なり消防署なりに連絡をして、とにかく遠縁でもいいので探すのが基本になっています。

法律的には特に縛りはないんですけど、病院ってきちきちっと決めたがるところがあるので、血縁者を優先順位の一位にしてしまうのが現状なんだと思います。

創：血縁者は変更がないですもんね。

まり：近年身寄りがないご高齢者の方もいるので、そういう場合は役所の生活福祉課であったり。あとは最近だと宗教団体の方がサポートしてくれるというのが時々あって、ソーシャルサポートというんですけど、サポートしている方のつながりの強さ、ご本人が話せるときにどこまでその人に意思表示をしていたかというところを聞きながら、血縁じゃなくても対応してくれる人とやり取りすることもあります。



同性パートナーの立場は、現状ではまだまだ不安定

創：緊急連絡先カードみたいなものはLGBT関係でもずいぶん前から配布しているところはあるんですよ。パートナーの連絡先を書いて、手術の説明はこの人にしてくださいとか、この人に同意を取ってくださいとか。でも、効力は実際のところどうなんだろう。

まり：個人病院など公立ではない病院はその病院の裁量が大きく反映するので、事情をしっかり説明すると対応してくれるところもあるんですけど、公的病院となるといろんなところの動かし方が難しくなってくるので、個人で作ったカードだとなかなか認めて貰えないのが現状なんです。大変申し訳ない話なんだけど、もう一筆書いていただいて判子を押してという、手書きのものを準備していただいていました。

創：パートナーシップ宣誓制度の受領証のように、公的機関の発行したものがあればそれが証明する物になりうるんですね。

まり：公的機関が発行したものは公的病院のなかでは特に重要視されていると思います。

あずき：一方で、当事者の親が仲を認めていなくて「どうして親に伝えずにパートナーに伝えるんだ」と揉めたりして、医療機関が板挟みになっちゃうようなケースも･･･。医療機関としては、そういうトラブルを避けたいという考えもあるでしょうね。

創：親御さんと絶縁状態になる当事者もいますもんね。そうなると、こじれこじれて…。

まり：医療ソーシャルワーカーが入っている医療機関であれば、頼っていただければドクターや家族とのつなぎだったりというところで上手にやってくれるワーカーが増えてきているので、そこを切り口にしていくのもすごく大事かなと。

創：医療ソーシャルワーカーさんはどのくらいの病院に在籍されているんでしょうか？

まり：病院によって名称などの違いはありますが、青森県の入院施設がある病院では、約7割で医療相談部門が設けられているという報告があります。

創：なるほど。もし相談先がわからない場合は、「受診にあたって相談したいことがあるのですが、医療ソーシャルワーカーさんはいますか？」と病院に問い合わせてみるのもいいかもですね！

あき：病院の中に頼れるところがあったらいいですよね。

まり：青森県内の医療ソーシャルワーカーもまだまだこれからで、昨年（2020年）の秋に医療ソーシャルワーカー向けの研修会を開きました。一方、医療機関の内部での研修会としてLGBTに関することをテーマにやっているかというと、ほぼゼロです。病院の中でそこを理解してもらう仕組みを作っていくことも必要だと感じています。

もう少し方法がないのか、考えていきたいです。

倫理審査のこと

創：研究にまつわる話に戻るんですけど、取り組むにあたって「これは思った以上に大変だぞ」ということはありました？例えば、答えてくれる人が思った以上に集まらないとか。

まり：東北地方の方々にご協力いただいて1つの研究は終わっていますが、多くの人から集まらないからこそ問題となっているテーマなので、人数の多い少ないは問題ではなかったんです。ただそれを自分がどう一般的に、みんなに広められ

るかという、自分の力量の問題がまずひとつ･･･。

あと大学の倫理審査では、言葉や単語の使い方が答えてくれる人に不利益がないのかというところを、かなりシビアに審査されるんだなと今回感じました。

創：予想外といったら失礼かもしれないですけど「研究として成り立つのか」「ちゃんと効果が出るのか」みたいなツッコミが入るのかな、と勝手に思っていました（笑）でもどちらかというと研究の対象になる方に不利益がないように、という部分が重視されるんですね。

まり：倫理審査はそういう部分が大きくて。研究の内容というよりは配慮というか、そのあたりがすごく重視されるようになっているみたいです。

創：なるほど。スクランブルエッグには研究協力の依頼も結構寄せられるんですけど、なかには「えっこれは協力どうしよう？」と悩むものもたまにあるんです。当事者の心情としてはちょっと…みたいな。そういうことがないように、ということなんでしょうね。

ご自身の変化と、目指すところ

創：この研究をすることで当事者とお話ししたり、接したりする機会も増えたと思うんですが、自分が変わってきたなと思う部分はなにかありますか？

まり：元々、なぜ違いを強調して受け入れがたいっていう人たちが多いのかというのが、私自身が理解できなくて。私にとっては、普通にみんなおんなじだよねっていうのがあるので、マジョリティ、多数派って言われている人たちが、なんでそこまで抵抗を持っているのかわからなかったんです。

障がい者や障がい児に関するところも少しやらせてもらっていて、そこも色んな差別とかがあったりして。色んな場面で色んなマイノリティの方がいるけど、なんで多数派は少数派を排除しようとするのか、そもそも同じ土台にいないって思っていること自体がおかしいんじゃないか、とずっと思っていたんです。

だから、自分は変わっていないけど、今回こういうきっかけというかご縁があって、少しずつどこかで発信できるチャンスに恵まれてはきたかなという変化は感じています。そこでできるだけ丁寧に伝えていきたいですね。私も言葉が上手くないんですけど。

創：まりさんの中では、ご自身の当事者に対する認識というよりも、マジョリティの人がどうしてそう感じるのかなっていうところが気になっているんでしょうか。まりさんみたいな視点で考えて下さる方がいると、マイノリティだけで頑張るよりも、ずっと進めやすい感じがしますね。

まり：そうなればいいなと思っています。

医療ソーシャルワーカー協会の全国のほうにも顔を出したことがあって。その中でもこの分野に関心のある方って少数なんですよね。でも、困っている人と医療をつなぐ役割は誰かがしなきゃいけない。その部分で私が関われるところがあるのかなと思ってもいるので。

創：最後に、まりさんが最終的に目指すところ、こうなったらいいなと思っているものを改めて伺ってもよろしいですか。

まり：誰でも受診する権利、治療を受ける権利がある。それを阻むような壁を病院側が作らないようにしていきたいですね。誰でも困ったときに病院に来られる環境作りのひとつとして、働きかけることができたらと思っています。

創：LGBTってたまたまそのテーマではあるけれど、広く見ればそこに区別があるわけではなくて、受診に困難を感じている人がいるならば、その壁がなくなっていけばいいという思いですよね。

まり：ひとつの個性というか、それも含めてその人なんだよっていう。誰もが普通に、安心して医療機関を受診したり、困ったときに相談したりできるようになればいいなと思っています。

12月、弘前市の講演会でパネリストとして発言するまりさん

＊＊＊＊＊＊

心身の不調や命の危機に直面したときは、心細さを感じたり、悩みや戸惑いを抱えることがあると思います。それはもちろんLGBTの人たちも同じです。

しかしLGBTの人たちにとって、これまで生まれ育ってきた社会は受容的なものではありませんでした。そのために今もまだ周囲の誤解や自身の不安感はなくならず、安心してカミングアウトや相談ができる状況ではありません。

ぜひ医療機関のみなさまには、相談を受けるかもしれないと考え備えていただけたらと思います。医療機関からの「安心して相談してほしい」というメッセージが、病気等で強い不安を抱えながら悩んでいる当事者に届くことを願っています。

（創）

※本文では、性的マイノリティ全般を示す言葉として「LGBT」を使用しています

インタビューこぼれ話

～編集部冥の雑談～

①言葉って難しい

ほんのりALLYには掲載しなかったんですが、まりさんに「LGBTの人と実際に話してみて感じたことはありますか？」って質問したときの回答が、なんかそれって当事者もだな～って思いました。

もちろん普通にお話ができるんですけど、逆にどこまで聞いていいか考えてしまう部分もあって。どう聞いたら相手を嫌な気持ちにさせないかとか、でも気にしながら話すこと自体がダメかもしれないとか･･･分からなくて。

ありますよね、そういうの。
例えばセクマイを表す言葉でも、“LGBT”だと一部のセクシュアリティに限定されているように見えるっていう人もいれば、“性的マイノリティ”だとマイノリティという表現が気になるっていう人もいたり。

最近は“LGBTQ+”っていうのも広まってきてますよね。新しい言葉がどんどん増えていく･･･。

ホント、言葉ひとつとってもセクマイひとくくりで「これが正しい！」って決めたりできないよね。

これって、異性愛の男の人・女の人も同じですよね。たとえセクシュアリティが同じでも、何をどう感じるか、何を大切にしたいか、みんなそれぞれ少しずつ違うんじゃないでしょうか。

そうだよね。まりさんが「わからない」って悩んでいるのも、そういう一人ひとりの違いを大事にしようとされているからこそ、なのかも。

簡単に「わかる」って言われるより、わかるために話を聞こうとしてくれる方が、嬉しいなって思います。

②病院を受診するときの困り事

あずきさんやあきちゃんはどう？病院でセクシャリティに関して困る場面とかあります？

そうですね。婦人科に行ったときに、込み入った話をどこまですればいいのか、とか･･･。

手術歴とか大きな病気をしたことがありますかとか、問診票に書いた方がいいのかな？って。
いつも書かないんですけど。悩むことはありますね。

なるほど。パートナーが同性だって話して大丈夫なのかなとか、この話って診察に必要なのかなとか、悩んじゃいますよね。
カムするのって、まだまだ簡単なことじゃないもんなぁ。

そうさんは実際に困った体験ってありますか？

問診票の手術歴に「性別適合手術」って書いたら、「子宮卵巣摘出ですか？」って確認されたことが。
医療関係者と用語や認識が違ったりするから、どう伝えればいいのか戸惑うこともあるよね。口に出しづらい内容だったりもするし･･･。

看護師や医師が、どのくらいセクマイと医療に関する知識があるのかもわからないですしね･･･。

健康診断で、性ホルモン剤注射を定期的を受けていることを問診票に書いたら「これは関係ないから書かなくていいです」って言われたこともあったよ。

どんな薬でも副作用があったりするので、気をつけないと･･･でも現状は、医療機関でも副作用の説明がなくて、自分の体調不良の原因がわからずにいる当事者もいたりしますよ。

適切な治療を安心して受けるためには、情報を共有するって大事なことなんですね。

コミュニティは無限大!?

Community→Infinity

インフィニティ

第3回

いくつかのLGBTコミュニティを訪ねたり、地域コミュニティを離れたりした経験のある方に、ご自分の視点から見た“コミュニティ”について自由に書いていただこう！　という企画「コミュニティは無限大（インフィニティ）！？」。
今回は、LGBTQ+当事者＆理解者の居場所づくりを目指して2020年5月にスタートした「にじまゆプロジェクト」の中の人、ほよさんに寄稿いただきました。弘前、フランス、東京、ロンドン･･･様々な場所で暮らしてきたほよさんには、各地のLGBTQ+コミュニティやイベントはどんな風に見え、どんな思いからにじまゆプロジェクトを始めたのでしょうか。

コミュニティという観点では、私がLGBTQ+当事者の集まる場所に参加したのは、弘前大学のセクシュアルマイノリティサークル「SALAD HOUSE」が初めて。当時、教養の授業でLGBTという言葉を偶然知り、自分がそうかもしれないと思って、恐る恐る足を踏み入れた場所でした。実際には、お菓子を食べながら雑談するだけという、ゆるゆるのサークルだったのですが……。今思えば、その後の自分のLGBTQ+コミュニティのかかわりへの原点は、そこにあったのだと思います。

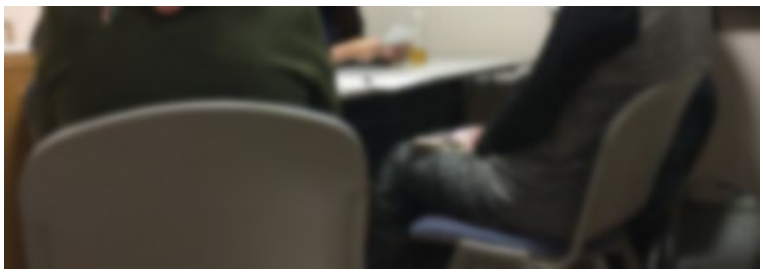
「SALAD HOUSE」は弘前大学で公認サークルとして活動していた（2010年提供のポスター）

大学時代には、フランスに留学する機会もありました。「SALAD HOUSE」への参加は一時休止する形になりましたが、代わりに留学先の大学にあったLGBTQ+コミュニティに参加しました。プライドパレードに参加するなど、社会的な活動も一部ありましたが、活動のメインはバーに集まって雑談をすること。日本にいたときと、あまりやっていたことは変わりませんね。

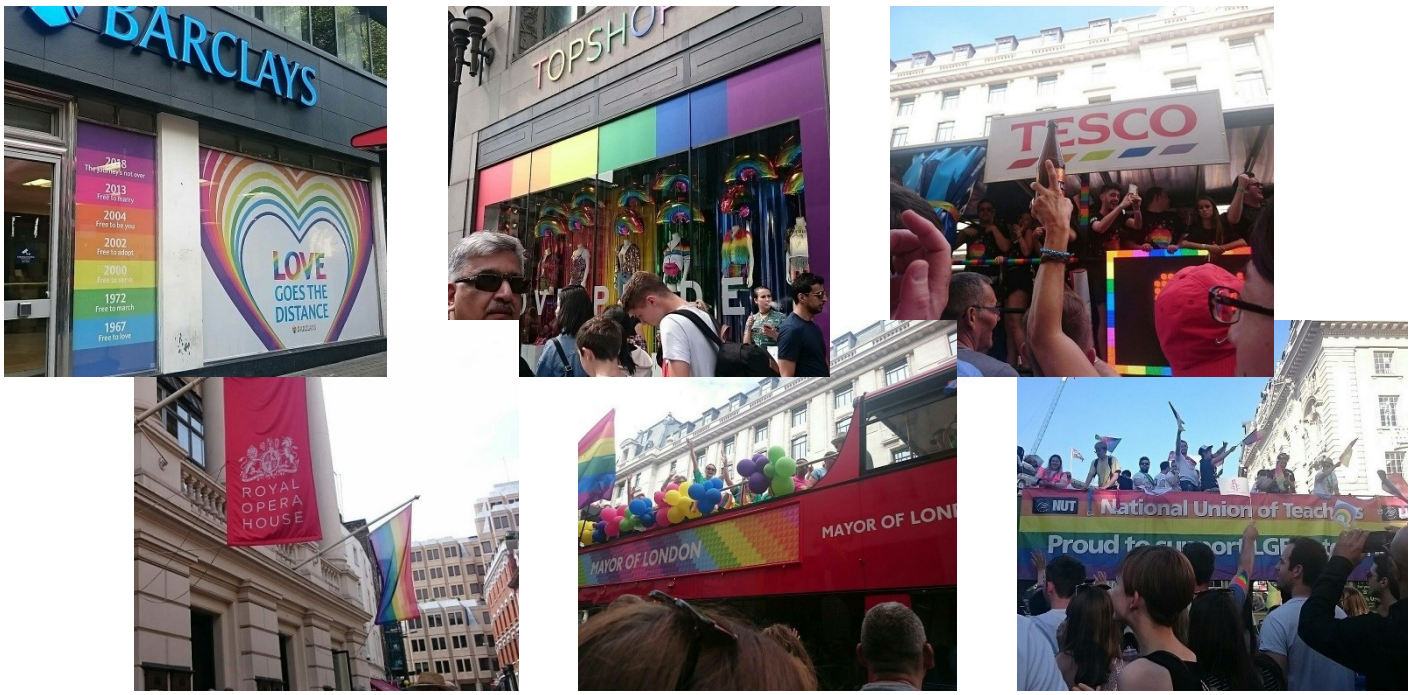
帰国した私は、フランスで体験したような社会的な活動にも興味を持ち、「SALAD HOUSE」に戻ると同時に、「スクランブルエッグ」にも参加し始めました。思えばもう10年以上経っていますが、青森を離れた今も、ずっと「スクランブルエッグ」に籍を置いています。今もこうして原稿を書かせていただいています。

その後、就職と共に東京に行くことになった私は、今度は特定のコミュニティに所属はせず、参加者としていろいろなイベントに顔を出していました。しっくりくるものがあれば、所属も考えていたのですが、東京には、良くも悪くもゆるくない団体が多くて、結局イベントに参加するだけに留まりました。

スクランブルエッグのイベントでは、受付や案内のメイン担当になることも多く、運営をサポートしていた


時にはスピーカーとして自身の体験や知っていることを伝えてくれた

そして、今度はロンドンに引っ越し、仕事をすることに。そこでは、アセクシュアルの方が集まって毎週ブランチするイベントがあり、そちらに顔を出していました。ロンドンではプライドパレードも経験しましたが、規模が非常に大きかったです。お昼ごろからフロートが出始めて、19時くらいまでやっていたような気がします。ロンドンは、多数の民族や文化が入り混じる場所ですし、意識せずともLGBTQ+当事者が周りに多く、居心地が良いと感じることが多かったです。



ロンドンでのパレード。街の様子。

帰国後は、またイベントへの参加者側に回っていましたが、なんとなく消化不良で、自分が好きにやれるような居心地の良い場所が欲しいと思うようになりました。その中でコロナ禍となり、オンライン飲みが流行する中で生まれたのが、LGBTQ+当事者と理解者の居場所づくりをコンセプトにした「にじまゆプロジェクト」。これまでの活動は、100%オンラインです。テーマを設けてたっぷりお話しする会と、時間内入退室自由で、ゆるく雑談する会を、オンライン会議ツールを使って開催しています。いずれ、リアルイベントも企画していきたいです。

自分がかつて参加していたLGBTQ+コミュニティは、恐らく半分以上は既に存在しません。学生団体だと特に、卒業に伴うメンバーの入れ替わりがあり、なかなか存続が難しいと聞きます。コロナ禍で世の中が変わってしまった現実もありますので、にじまゆも形にこだわりすぎず、その時代に合わせた柔軟なプロジェクトでありたいと考えています。

本当のところを言うと、「LGBTQ+」とくくる必要すらもなくなって、にじまゆのような場所がいらなくなるのが理想でもあるんですけどね。自分自身が必要だと思っている間は、ゆるゆる活動を続けていきたいと思っています。

にじまゆプロジェクト

LGBTQ+当事者＆理解者の居場所づくりを目指し、2020年5月にスタートしたプロジェクト。zoomを使ったオンライン交流会を実施している。コロナ終息後は、オフ会の実施も検討中。

ホームページ
https://nijimayu-project.jimdosite.com/

@nijimayuproject

たましポ

レポート2．杉山文野さんの話とパネルディスカッション聴いてきたよ

以前の企画でお世話になった市の担当さんが関わってるみたいなんですよ
アさん
前回のにじたまも見てねー
実際のとこどれくらいお客さん来るんですかねー
平日だしそんなに人集まらなそうですよねー
ってえぇぇ!?
定員100名の席はほとんど埋まっていて新聞やTVの取材、会場のスタッフさんやらいっぱいいて想像以上の規模にビビる我々
※席は実際は前後が重ならないように配置されていたり、入口で手指の消毒など感染対策されていました
機材トラブルで遅延するも、
大丈夫かな・・・
小話でもして場をつないだほうがいいかな・・・
オロオロ
創さん優しいな・・・
迷ってるうちに講演会スタート

第一部は
NPO法人東京
レインボープライド
共同代表理事
杉山文野さんによる
オンライン講演会

newファミリーを
テーマに、
これまでの経験や
現在の活動、
子育ての話などを
聴くことが
できました

そういえば、
杉山さんの著書
ダブルハッピネス
買ったなあ

あの頃は
どう生きれば
いいか
わからなくて
いろんな本や
ブログとか
みてたなあ

と、ふと
昔を思い返したり
してました

第二部は
パネルディスカッション
性の多様性をテーマに
医療現場での実情や、
行政の取り組みに
ついて紹介が
ありました

時間の都合上
コンパクトに
終わりましたが
もっともっと
聴きたかった・・・！

モデレーター
弘前大学 助教
山下梓 さん

パネリスト
弘前医療福祉大学
助教 尾崎麻理さん
弘前市
企画課長
白戸麻紀子さん

終わりましたねー どこが印象的でしたか？
ぱち
ぱち
ぱち
ぱち
ぱち
ぱち
ぱち
僕は開会の挨拶の時に感動してました 市のリーダーである市長がセクマイのイベントで挨拶してくれる日がくるとは！
3組6名の方がパートナーシップ宣誓しており…
すごいことですよね～
質疑応答では悩まれている方からのお話もあって、支援を必要とする人がまだまだいるんだろうなあと実感しましたね
何より、市の職員さんや大学の先生、講演会の間何度も頷いていた参加者の方など、地域で暮らすいろんな人が真剣にこのテーマについて考えてくれる姿にグッときましたねー
嬉しいですよね
ALLY
その後創さんは会場で親戚や知り合いの方にばったり遭遇するのでした…
2月には青森県のパートナーシップ制度も始まりましたね！
こんな急展開とは！これを機に東北でも取り組みが進んでいくといいですね～
では次回のにじたまで～

スマッシュヒット！

SMASH HIT!

たまごメンバーが個人的にオススメする本・映画・ドラマなどの情報

『しまなみ誰そ彼』／鎌谷悠希／小学館

クラスメイトに自らの性指向を知られたと怯える高校生・たすく。自殺を考える彼の前に「誰かさん」と呼ばれる女性が現れ、「談話室」へと誘う。そこはさまざまなセクシュアリティを持つ人々が集う場所で――。

当事者同士であっても分かり合えなかったり、善意ゆえに傷つけてしまったり……きっと誰しも経験があるでしょう。主人公であるたすくも傷つけられた苦しみを抱えながら、無自覚に人を傷つけてしまいます。それでも前を向こうとする彼らに寄り添うように、心の揺らぎが丁寧に描き出されます。

尾道の美しい景色を舞台に、人々との交流を経て成長する少年の瑞々しい姿に胸を打たれる一作です。　（あずき）

2021年度 その他の活動

今年度も新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、原則としてオンラインで活動を行いました。

●講師派遣

今年度は、教育機関での講義や養護教諭の先生方の講習会でお話をさせていただく機会がありました。ご依頼をいただいたみなさまには、オンラインでの派遣にご理解をいただき、ありがとうございました！

●会議、懇談会等への参加

青森県男女共同参画センターのアピオあおもり秋まつり関連の説明会・会議や、秋田県北部男女共同参画センターの利用者懇談会等、オンラインで出席させていただきました。

●調査・研究、取材等への協力

大学生・高校生の調査・研究への協力や、メディアの取材への協力をさせていただきました。研究協力は年々依頼が増えており、対応できずお断りさせていただくこともありました･･･。

●総会、ミーティング等

メンバーの集会も、引き続きオンラインで実施しました。

細々と、でもいろいろやってます☆

たまご隙間語り

紙面埋めてます

皆さん、こんにちは。代表のヒロです。代表ですが、なんにもしていません（冗談ではなく本当になんにもしていません）。一応今は代表を名乗りつつ、学生時代からこれまで10年ほどスクランブルエッグの活動を続けてこれたのは、ひとえに運営を担ってくださっている事務局の方々とメンバーの皆様のおかげです。改めて、本当に、ありがとうございます。

少し紙面が空いているというので、今、そして今後の活動について想いを馳せて、1000字ほど書いてみたいと思います。

感染症のこともあり、近頃は交流会などの活動が全くと言っていいほどできていません。世界中の誰とでも繋がれるこの時代に、それでも直接会える、というのがスクランブルエッグの強みだと思っていますが、それができない近頃は、やっぱり寂しい。とはいえ、10年続いたおかげで、メンバーそれぞれの年を重ねてステージが変わり、生活環境が変わってきたこともあって、活動内容も変革する時期に入っているのだと思います。

ここ数年は、ラジオ番組の企画をしてみたり、WEBで会ってみたり、チャット会を開いてみたりと文明の利器を使った企画も始めてみたりしています。どれも楽しく、意味を感じますし、時代に合っているとも感じます。便利さと可能性の拡がりを感じると共に私が考えるのは、私たちが失っているものは何か、ということです。なんだか後ろ向きな感じもするかもしれませんが、決して薄暗いものではありません。そこには、人とつながることや、人間の存在を考える上で、大事なコアのようなものがあるような、ある種明るい予感なのです。その答えの一つ、私達が失っているのは「向き合う」機会ではないか、と思うことがあります。

ある人が言っていました。人は普段、玉ねぎみたいに色々なものを何重にも着込んでいる。玉ねぎの外側を剥いて剥いて剥いて…あなたの一番内側にあるその何かに、私は触れたい、と。私も、そう思います。それは誰かに無理やり剥がされるのではなく、その人自身が、その一枚一枚を剥がしていくということが大事だと思います。また、一番内側の柔らかい部分に触れるのは、怖いことでもあります。だから、その内側を見る方にも、心の準備が必要です。時にそれは他者に限らず、自分の一番内側を見るにも心の準備が必要です。私にとって「向き合う」ということは、この一枚一枚を剥がす作業であり、誰かの一番内側の柔らかい部分を見る覚悟であり、準備であります。

そういう機会が減っているな、という話から今後の活動について話そうと思ったのですが、スペースがなさそうなのでまた次の機会にお話しましょう！（笑）　（ヒロ）

発行元：スクランブルエッグ
発行年月：2022年3月
ＵＲＬ：http://gochamazetamago.main.jp/
メール：gochamazetamago@yahoo.co.jp
☆最新情報はこちらでチェック→ @gochamazetamago